

令和8年度
入学試験問題

第1回

国語

- 1 問題用紙は監督者かんとくしゃの指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入してください。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点くとうてんや符号ふごうは一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから16ページまであります。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	------------	--

森村学園中等部

□ ① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

縄文時代にも、農業がまっただけではなかったわけではない。狩猟採集を基盤としながらも、小規模な作物栽培を行ったり、サトイモなどを植えて、放置しておく半栽培が行われていた。また、縄文時代の中期になると焼き畑などの原始的な農業が行われるようになったと言われている。狩猟採集に頼っていた旧石器時代から縄文時代は貧しい時代であり、稲作農業が定着した弥生時代は豊かな時代であるというイメージがある。しかし、^① 実際にはそうではない。

水を田んぼに引き入れて、農作業を行う稲作には、多大な労力を必要とする。

狩猟採集で労力なく食糧を得ることができれば、わざわざ苦勞をして稲作などする必要はないのだ。そのため、日本に農業が伝わっても、日本に住んでいるすべての人々が、すぐに大喜びで稲作を始めたわけではなかった。

稲作が大陸から九州北部に伝えられたのは、縄文時代後期のことである。その後、稲作は急速に広がり、わずか半世紀の間に東海地方の西部にまで伝わったとされている。しかし、そこから東側には、なかなか広がっていかなかったのである。なぜか。

気候が温暖な当時の東日本は、食糧に困らない豊かな地域であった。

^② 縄文時代中期の一〇〇平方キロメートルの人口密度は、西日本ではわずか一〇人未満であったのに対して、東日本では、その数十倍の一〇〇〜三〇〇人であったと推計されている。温暖で豊かな落葉樹林が広がる東日本は、大勢の人口を養うのに十分な食糧があったのである。人口を支える食糧が不足する西日本では稲作は急速に広がったが、^③ 十分な食糧がある地域では、労働を伴う農業は受け入れられなかったのだ。

□ I、縄文時代から弥生時代にかけて、稲作はゆっくと時間を掛けながらも、確実に広がっていった。

どうして、食糧の豊かな地域にも農業が受け入れられたのだろうか。

一つには気候の変化を挙げることができる。

約四〇〇〇年前の縄文時代の後期になると、次第に気温が下がり始めたことから、東日本の豊かな自然は、大きく変化をするようになった。特に、東日本は、先述したようにもとの豊かな食糧に支えられて人口密度が高かったから、食糧の不足は切実な問題となったことだろう。

しかし、^③ それだけではない。

農業によって人々が得るものは、単に食糧だけではない。

狩猟採取の暮らしでは貧富の格差は起こりにくい。獲物を大量に獲っても、一人が食べることで済む量は決まっている。食
べきれない分は仲間と分配するしかない。

III、農業によって得られる穀物は、食べきれなくても貯蔵をすることができる。貯蔵できる食糧は「富」となる。こうして富を持

つ人が現れ、同時に貧富の格差が生まれるのである。

弥生時代の遺跡からは、たくさんいせきの壺つぼやかめが発掘される。これは穀物を貯蔵するために使われたものだ。また、縄文時代までは祭殿さいでんとして用いられていた高床式の建築が、弥生時代になると高床式倉庫として利用されるようになる。稲作によって、「蓄える」という行動が起きるのである。

さらに、米を生産するには多大な労力が必要とする。米をたくさん持つ人は、富と権力を持ち、富と権力で人々を集め、さらに多くの水田を拓いていく。富める者はますます富んでいくのである。

また、稲作のような本格的な農業を行うためには、水を引く土木工事の技術や、農耕のための道具などが必要である。そして、農業を行うための技術は、戦うために砦とりでを作ったり、武器を作る技術にもなるのである。

お腹いっぱいになれば満たされる食糧と異なり、「富」は、蓄積することもできれば、奪い合うこともできる。攻めては富を得ることもできるし、攻められれば富を奪われることもある。こうして、農業を行う人々は、競い合って技術を発展させ、強い集団社会を形成していったのである。

こうして、農業は「富」を生みだし、強い集団社会を生み出した。そして、技術に優れた水田稲作を行う人々は、時には武力で狩猟採集を営む人々を圧倒していったのである。もしかすると「豊かさ」が持つ意味合いはこのとき、農業によって大きく変貌へんぼうしてしまっただのかもしれない。

⑤ 縄文時代は争いのない時代であったと言われる。縄文時代の遺跡からは、戦いで傷ついたと思われる人骨は発見されないのだ。しかし、弥生時代になると、戦いで死んだと思われる傷ついた人骨が発見されるようになる。

米は豊かな富をもたらしたが、同時に争いももたらしたのである。

もつとも私たちがイメージしがちなように、大陸からやってきた弥生人たちが、縄文人を武力で滅ぼしていったというわけではないらしい。大陸からやってくる弥生人たちは、大勢が一気に押し寄せたわけではなく、少数ずつ時間を掛けてやってきた。そのため、もともと住んでいる多数派の縄文人と交流しながら、また縄文人も稲作技術を取り入れながら、稲作は日本に広まっていったのである。

④ 昔、ガラケーと呼ばれる携帯電話を使っていた大人たちが、スマートフォンスマートフォンの時代になって滅んでしまったわけではなく、ガラケーを使っていた大人たちが、スマートフォンを使うようになった。同じように縄文人たちもまた、弥生人の進んだ文化を取り入れていったと考えられて

いるのである。

⑥ いずれにしても、稲作という革新的な技術は、日本の歴史に革命を与えた。

縄文時代は一万年以上続いたとされているが、弥生時代は一〇〇〇年にも満たない。

(中略)

用水路を引いた水田の形や、鍬や鋤といった農具など、弥生時代に構築された稲作の基本技術は、^⑦驚くことに戦後、農業が近代化され、トラクターなどの機械の導入や化学肥料・農薬が使われる昭和の時代になっても、ほとんど変わることなく引き継がれてきた。ただ、大きく違うのは収穫作業である。

弥生時代の稲作といえば、教科書では「石包丁」がおなじみだろう(図1)。

今では、機械が地際から稲株を収穫していく。また、人力で収穫する場合も、鎌を使って地際から(図2)稲刈りをする。しかし、弥生時代には、石包丁というナイフのような道具で、稲穂だけを摘み取っていたのである。

⑧ 稲穂だけを摘み取っていたのには理由がある。

野生の植物というのは形質がバラバラである。もし形質が揃うと、環境の変化で全滅してしまう危険がある。そのため、寒さに強いものや暑さに強いもの、病気に強いものなど、さまざまな形質の個体で集団を作るのである。さらには、稲穂の熟す時期もバラバラである。ある株は早い時期に穂をつけて成熟するし、ある株はゆっくりと穂をつける。こうして、種子を作る時期をずらすのである。そのため、田んぼの中で熟した穂を探し回りながら、石包丁で一つ一つを摘み取っていく必要があるのだ。

しかし、これではあまりに効率が悪いので、イネの形質を揃える努力が払われてきた。たとえば、早く穂を出した稲穂から籾を取って、翌年に種を播き、また早く穂を出した稲穂から籾を取って種子とする。これを繰り返していけば、同じくらいの時期に穂を出す個体が増えていくことだろう。しかし、多様性を持つ不均一なものを、均一に揃えるということは、一方では、全滅するリスクが高まるということである。そのため、古代の人々は収穫作業の不便さを承知の上で、あえてバラバラな形質を維持してきたのだ。しかしその後人々はイネの形質の均一化を図るようになった。これは、全滅のリスクを減らせる程度に、稲作技術が発達してきたという証拠でもある。

やがて古墳時代になると、稲刈りは大陸から伝えられた「鎌」という道具を使って、地際から収穫されるようになる。

これは、やがて日本人の生活に革命的な出来事を起こす。

地際から収穫することによって、イネの茎である藁を使うことができるようになったのだ。やわらかくて丈夫な藁は、加工すればさまざまに利用することができる。米を入れる俵も藁から作ることができるし、草鞋や筵、蓑などを作ることができる。

こうしてイネの性質が均一化され、地際から収穫されることは、日本人の暮らしにも影響を与えていくのである。



(図1) 石包丁



(図2) 鎌

(稲垣采洋『イネという不思議な植物』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したり、図や表記を改めたりしたところがあります。

(注)

* 狩猟採集……野生の動植物の狩猟や採集を生活の基盤とする社会のこと。基本的には、農耕が開始された新石器時代までは、狩猟

採集社会だったと考えられている。

* 地際……植物が地面と接している部分。

問一 —— ①「実際にはそうではない」とありますが、では、実際はどうだったのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 縄文時代は決して貧しい時代ではなかった。
- イ 弥生時代は決して豊かな時代ではなかった。
- ウ 縄文時代はむしろ弥生時代よりも豊かだった。
- エ 弥生時代も縄文時代と同じように貧しかった。

問二 —— ②「十分な食糧がある地域では、労働を伴う農業は受け入れられなかったのだ」とありますが、十分な食糧があると、なぜ、農業は受け入れられないのですか。その理由にあたる三十字以上三十五字以内の一文を、これ以前の本文中から探し、最初の五字をぬき出しなさい。

問三

I III に当てはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使うことはできません。

ア しかし イ たとえば ウ 一方 エ というのは オ そのため カ しかも

問四

③「それだけではない」とは、どのようなことを述べているのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 弥生時代に稲作が広がったのは、人口が増加して食料が不足したからだという理由だけではないということ。
- イ 弥生時代に稲作が広がったのは、縄文時代の豊かな自然が失われたからだという理由だけではないということ。
- ウ 稲作が東日本にも広がったのは、東日本の人口密度が高かったからだという理由だけではないということ。
- エ 稲作が東日本にも広がったのは、温暖だった気候が変化したからだという理由だけではないということ。

問五

④「『豊かさ』が持つ意味合いはこのとき、農業によって大きく変貌してしまった」とありますが、筆者は、農業によって「豊かさ」の意味がどのように変わったと考えていますか。その説明として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 狩猟採集の暮らしという自然との一体感による心の豊かさから、自然を人間の力で破壊した末に得られる物質的な豊かさへと変わった。
- イ 空腹が満たされればそれで満足することができた豊かさから、豊かさの限界がどこまで求めてもとどまることのないものへと変わった。
- ウ 一人一人の生存に関わるためにだれもが必死になって求めた豊かさから、富を手にした一部の人が求める豊かさへと変わった。
- エ 周囲の人々と分かち合うことのできる豊かさから、他者に比べて所有する富が多いのか少ないのかによって決まる豊かさへと変わった。
- オ 空腹を満たした時にしか得られない不安定な豊かさから、貯蔵する富が増えるにしたがい増大していく、安定した豊かさへと変わった。

問六

⑤「縄文時代は争いのない時代であった」とありますが、縄文時代が弥生時代に比べて「争い」がなかったのは、なぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 狩猟採集の暮らしでは人々はお腹がいっぱいになればそれで満たされ、他人の食料まで手に入れたという欲望を抱かなかったから。
- イ 狩猟採集の暮らしでは仲間と協力し合って食料を手に入れていたため、人びとが互いに憎しみ合うようなことは起こらなかったから。

ウ 狩猟採集の暮らしては食べきれない食料は仲間と分配するしかなく、貯蔵した「富」を奪い合うようなことは起こらなかったから。狩猟採集の暮らしては貧富の格差は起こりにくく、人びとの間に支配する者と支配される者という対立関係が生じなかったから。

問七 —— ⑥「縄文時代は二万年以上続いたとされているが、弥生時代は一〇〇〇年にも満たない」とありますが、この一文から読み取れる

筆者の意図の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 縄文時代の長さを強調することで、農業に依存しない狩猟採集生活こそが、実は人々に豊かさをもたらしていたのではないかとこの疑問を投げかけようとしている。

イ 縄文時代の長さを強調することで、大陸からやってきた弥生人たちが、少しずつ時間をかけて縄文人と同化したのではないかとこの自分の説を裏づけようとしている。

ウ 弥生時代の短さを強調することで、稲作がもたらした争いのある社会が決して長続きしないことを示すとともに、平和の尊さについて考えさせようとしている。

エ 弥生時代の短さを強調することで、稲作によって人々が富を得たことを機に、社会が急速に変化し、歴史の流れが一気に加速していったことを印象づけようとしている。

問八 —— ⑦「驚くことに」とありますが、筆者は、どのようなことに対して驚いているのですか。その説明として最も適当なものを次から

選び、記号で答えなさい。

ア 稲作の基本的な技術の多くが、すでに弥生時代には出来上がっていて、それほど先人たちの技術は優れていたのだということ。

イ 稲作の基本的な技術の大半は、長い間、他の文明の発達の陰に取り残されて、原始的なままで変わらなかったのだということ。

ウ 昭和の時代になると稲作にも科学技術が導入され、労働力の軽減や収穫量の増大など、飛躍的な進歩がみられたのだということ。

エ 昭和の時代になるまで、弥生時代に構築された稲作技術の多くは継承され、人びとがその伝統を守り続けてきたのだということ。

問九 —— ⑧「稲穂だけを摘み取っていたのには理由がある」とありますが、古代人が「稲穂だけを摘み取っていた」のは何のためですか。

その目的を五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問十 次の選択肢は、本文中の①から④の記述について説明したものです。その内容として適当でないもの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア ① 縄文時代の人口密度について西日本と東日本の推計値を具体的に引用することで、当時の東日本が温暖な気候と豊かな落葉樹に恵まれた暮らしやすい環境であったことを裏づけている。
- イ ② 弥生時代の遺跡から出土した遺物を具体的に紹介することで、農業によって得られた穀物は貯蔵され、やがてそれが社会の中に貧富の格差をもたらしたのではないかという自説の根拠としている。
- ウ ③ 発掘された人骨から弥生時代が争いの絶えない時代であったことを推理するとともに、その推理をもとに、武器や砦を作るための技術が農業にも応用されたのではないかと考察を深めている。
- エ ④ ガラケーを使っていた人たちも今ではスマートフォンを使うようになったという身近なたとえ話を用いて、縄文人が弥生人の文化を取り入れていった過程を分かりやすく解説している。

② 「わたし」(美貴)は、裕福な家庭の子どもが多く通う清凜女学院(清凜)の初等科に通っていたが、親の会社が倒産したために中等科には進学できなかった。現在は、母と一緒に母の実家に引っ越し、公立の中学校に通っている。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

梢の様子がおかしいことに気づいたのは、期末テストの翌日だった。

その日の梢は、朝の挨拶の返事から、妙に無愛想でよそよそしかった。

(中略)

その後も原因はわからないまま、給食の時間になった。

(中略)

「そんなにこの学校の給食が気に入らないわけ？」

はっとしてとなりを見ると、梢が横目でわたしをにらんでいた。なぜにらまれているのかわからず、わたしは戸惑って言った。

「そういうわけじゃないわ。ただ、なんだか食欲がなくて……」

「無理しなくていいよ。お嬢様学校の豪華な給食を食べ慣れているから、こんな貧乏くさい給食は食べたくないでしょう？」
わたしは耳を疑った。どうして梢が、わたしの小学校のことを知ってるの？ 混乱して言葉をなくしていると、朋華が騒ぎだした。

「なにに、美貴ってそんなすごい小学校に通ってたの!? なんで教えてくれないのよ！」

「あつ、もしかしてあれじゃね？ 実は夜逃げしてこっちに引っ越してきたから、言いたくなかったとか？」

冗談めかした足立くんの言葉に、びくりと肩が震えた。けれど動揺はそれだけでなんとかおさえこんで、わたしは平然とした態度で言った。

「……引っ越しは、単に親の都合。けど、貧乏くさい給食を食べたくないっていうのはそのとおりだから、食べたければ遠慮しないでどうぞ」

冷ややかにそう告げると、足立くんは「いや、ああ、悪い」と面食らったように、わたしが差しだしたフライドチキンの皿を受け取った。そのあとで、^①わたしは梢の顔をにらみつけた。すると梢はわたしをにらみかえそうとしかけてから、気まずそうに給食に視線を落とした。

「誰に聞いたの」

給食が終わったあと、わたしは空き教室で梢に聞いたのだ。

梢の態度からは、給食のときのふてぶてしさが消えていた。大きな体を縮こまらせて、梢はぼそぼそとこたえた。

「……美貴のおばあちゃんに。美貴のおばあちゃん、うちのおばあちゃんと友達で、たまに話してくるのよ。春休みに会ったときに、美貴のことを聞いて、いっしょのクラスになったら仲良くしてあげてくれて……」

信じられない。わたしは思わずそうつぶやいていた。親の会社がつぶれて私立の学校に通えなくなったなんてこと、同級生に知られたら、わたしはどんなにみじめな気分になるか、祖母は考えもしなかったのだろうか。

声が震えてしまわないように、わたしは「そう」と無感情に言った。

「つまり、最初からわたしのことを憐れんで、親切にしてくれてたわけね」

「そんなつもりじゃ……」

言いかえそうとした梢の顔を、わたしはきつくにらんだ。そうしてないと、くやしくて涙がこぼれそうだった。対等と思っていた相手から、ひそかにずっと憐れみを受けていた。そのことはわたしにとって、耐えられないほどの屈辱だった。

「それで、どうしていまさらわたしの事情をばらしたりしたの。朝からわたしに怒ってみたいだけ、わたし、なにか気にさわることもした？」

「それは、美貴があんなこと書くから……」

わたしは「あんなこと？」と眉をひそめた。すると梢は責めるような瞳でわたしを見つめてこたえた。

「……公民館の、七夕飾りの短冊。清凜に帰りたいって、あれ美貴が書いたんでしょ」

ああ、とため息まじりの声もれた。勉強会が解散したあと、わたしはこっそり公民館にもどって、短冊に願いを書いていた。意味がないことはわかっていても、書かずにはいられなかったのだ。誰にもわかりはしないだろう、と高をくくっていたのが間違いだった。

まあ、もうどうだっていいけど。そんなふうに投げやりな気分であらう、梢がうつむいて続けた。

「あの短冊を見つけたとき、すごく悲しかった。あたしはもうすっかり美貴と友達のもりだったのに、美貴はずっともとの学校に帰ってきたんだって。あたしたちのことなんて、なんとも思ってたんだって。それでいらいらして、あんな……」

そう話す梢は本気で傷ついているようで、わたしは動揺してしまった。顔を上げた梢の目には涙のつぶが浮かんでいて、それを見たわたしはとっさに、^③ 梢に背を向けていた。

「もういいわ、じゃあ」

私は足早に教室を出た。廊下で聞き耳を立てていた朋華のことも無視した。

しばらくしても梢が追いかけてこないのほっとした。鼻の奥がさつきからずっと熱かったけど、意地でも泣いてやるものかと決めた。

(中略)

自分の部屋に引っこむと、カバンを乱暴に放りだして、畳に倒れた。畳のにおいがいつもより鼻について、口で浅く息をしていた。

廊下で最後に見た、梢の顔。あのときたぶん、梢はわたしに謝ろうとしていた。だけどべつに、謝らなくてもいい。絶対に謝らせたりしない。これでもう、友達ごっこを続けたいですむんだから。

「……せいせいしたわ、ほんと」

わたしは声に出してつぶやいてみた。なのに頭に浮かんでくるのは、なぜか梢たちといっしょにいたときのことばかりだった。教室でのおしゃべり、公民館の図書室の棚たなに積まれたおすすめの本、にぎやかにはしゃぎながら短冊たんさくを吊るすみんなの姿。

違う、そうじゃない。^④教室で孤立こりつしないためにつきあっていただけで、わたしは本気であの子たちと仲よくなりたかったわけじゃない。無理に仲よくなるなくたって、わたしのほんとうの友達ともだちは、清凜けいりんにちゃんという。

寝転ねころがったままカバンをさぐって、携帯けいたいを取り出した。電源を入れて、画面をじっと見つめる。けれどきょうもまた、メールは届いていなかった。

いや、たしか清凜の中等科の期末テストは、七月になってからだった気がする。だとしたら、いまごろみんなテスト勉強いそがで忙しくて、メールをしている暇ひまもないのだろう。そう、きつとそうに違いない。

^⑤わたしは自分に言い聞かせた。みつともないくらい必死に。

次の日から、わたしはひとりになった。

(中略)

ひとりぼっちのまま数日が過ぎて、七夕の日になった。公立の中学でも、七夕の給食には七夕ゼリーが出るものらしい。それは紙製のカップに入った白いゼリーで、トッピングに星型の小さなゼリーが二個、申し訳程度のに載っていた。

「……安っぽい」

わたしは誰にも聞こえない声でつぶやいた。それから、去年までの七夕ゼリーは、と思い出そうとして、もういいかげん嫌いやになった。

どんなに強く願ったところで、どうせもうわたしは、清凜にはもどれない。だからこうやっていちいちあのころといまをくらべるのは、ただ無意味につらくなるだけだ。

わたしはため息をついて、食パンに塗ぬるイチゴジャムの小袋こがひを開けようとした。するとそのとき、梢が「ねえ」とわたしに声をかけた。話をする気はなかったのに、反射的にそちらを向いてしまうと、梢は遠慮がちに言った。わたしの七夕ゼリーを指差して。

「それ、くれない？」

わたしは啞然あぜんとして梢の顔を見つめた。梢は上目遣うわめづかいにわたしの返事を待っていた。

驚おどろきとあきれがいらだちに変わり、けれど嫌だと返事をするのも癪しゃくで、わたしはゼリーのカップを乱暴に梢の給食のトレイに置いた。ありが

と、と梢が言ってきたけど、わたしはそれを無視した。

まったく、あきれてものも言えないとはこのことだ。いくら食い意地が張っているといったって、よりにもよってわたしの給食をほしがるなんて。

胸の中で軽蔑の言葉をならべながら、イチゴジャムの袋を千切ると、いきおいよく飛び出したジャムがトレイを汚して、頭がカツと熱くなった。けれど怒りはすぐに冷えてしぼまり、同時にわたしの心も暗く落ちこんだ。

……どうして、あんなにつけんどんにわたししたりしてしまったんだろう。気づけばわたしはその後悔していた。しょうがないなあ、と苦笑いでも浮かべて手渡していれば、それをきっかけに梢と仲なおりできたかもしれないのに、と。

強がってごまかすことはもうできなかった。梢と仲なおりがしたい。朋華たちともまた仲よくつきあいたい。それはわたしの本心だった。

たしかに梢はわたしが隠していたことをばらした。だけど、もともと悪いのはわたしだ。最初の理由がなんだって、梢はずっとわたしにやさしくしてくれた。わたしをひとりにしないでくれた。なのにわたしはつまらない意地を張って見栄を張って、梢のことを傷つけて……。

そんなことはもうとつくにわかっていたのに、それでもまだ梢のことを避け続けている自分に心底嫌気が差した。給食に手もつけず、机の下でぎゅっと両手を握りしめていると、騒々しいまわりの声が急速に遠ざかっていくのを感じた。

自分が泣きそうになっているのがわかった。けれど涙があふれる寸前で、「美貴」とわたしの名前を呼ぶ梢の声が耳に届いた。

梢のほうを向いたときには、無意識にまた不機嫌な表情になってしまっていて、わたしは心の中で自分をなじった。だけどわたしの不機嫌顔は、梢の持った皿を見た瞬間、驚きで塗りつぶされていた。

その皿のまんなかには、カップから丁寧に取りだされた七夕ゼリーが載っていた。しかもゼリーのまわりは、たくさんの星型のトッピングで飾られ、皿にはイチゴジャムでお洒落な模様が描いてあった。

その模様とトッピングのデザインには見おぼえがあった。勉強会の際に見た、高級スイーツの写真とそっくりだったのだ。

(中略)

「その、この前のお詫びについてどうか……美貴、すごく怒ってるだろうから、どうしたら許してもらえるか、みんなに相談したんだ。そしてら朋華がアイデアを出してくれて……」

梢が横目でとなりの朋華を見た。わたしもつられて朋華に視線を移すと、朋華はしたり顔で言った。

「ほら、お金で買ったものをあげるのもなんか違うでしょ、この場合。それでいろいろ考えたんだけど、このあいだ美貴があ的高级スイーツの写真をすごく熱心に見てたから、こういうのなら喜んでくれるんじゃないかなあ、って思って」

わたしは言葉を失ったまま、再び梢の顔を見た。梢は目を伏せて、わたしに謝ってきた。

「この前は、ごめん。美貴がつかうのはわかったのに、勝手にいらついで、美貴が秘密にしておきたいことをばらしたりして……」

問一 —— A 「面食らったように」・ B 「高をくくっていた」の意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 「面食らったように」

ア 予想外のことであわてふためくように

イ 怒られたことをごまかすように

ウ 恥はずかしくて照れたように

エ 心から申し訳なさそうに

B 「高をくくっていた」

ア 少しも隠かくそうとしなかった

イ 自分の行動に自信をもっていた

ウ たいしたことはないと軽く考えていた

エ まわりの人々をばかにしていた

問二 —— ① 「わたしは梢しずえの顔をにらみつけた」とありますが、「わたし」が梢をにらみつけたのはなぜですか。その理由として最も適当な

ものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」が給食を食べられない理由を梢が聞こうともせず、その理由を勝手に決めつけたから。

イ 給食があまりに質素で食べる気がしないという「わたし」の本音を梢が見透みすかして指摘しつてきしたから。

ウ 誰だれも知らないはずの「わたし」の秘密を梢が知っていて、それをみんなの前で話してしまったから。

エ 家が貧しくなったために「わたし」が夜逃よにげして引越ひこしてきたことを、梢がからかったから。

問三 —— ② 「朝からわたしに怒ってみたい」について、次の問いに答えなさい。

(1) 梢は何を見つけて怒ったのですか。見つけたものを二十五字以上三十字以内で答えなさい。

(2) (1)を見つけたことで梢が怒ったのはなぜですか。その理由を五十字以上六十字以内で答えなさい。

問四 —— ③ 「梢に背を向けていた」とありますが、このときの「わたし」の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 梢の「わたし」に対する友情を知ることができたが、自分にはその気持ちを受け止める資格がないと思い、梢から離れようとしている。

イ 梢が「わたし」のことを憐れあわれんでいたわけではなく、友達だと思って「わたし」と親しくしてくれていたとわかり、感動している。

ウ 「わたし」をずっと友達だと思っていたという梢の言葉をそのまま信じていることができず、梢や他の友達に対する不信感を募つらせている。

エ 「わたし」の本心を知ったことで梢がとても傷ついているということがわかり、その思いがけない梢の反応にとまどっている。

問五 —— ④ 「教室で孤立しないためにつきあっていただけで、わたしは本気であの子たちと仲よくなりたかったわけじゃない」とありますが、このようなきあい方を表わした語句をこれ以前の本文中から五字で探し、ぬき出しなさい。

問六 —— ⑤ 「わたしは自分に言い聞かせた。みっともないくらい必死に」とありますが、ここから読み取れる「わたし」の心情の説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 梢たちとけんかをしたことによって学校に居場所がなくなることを恐れ、昔の友達と話してその不安をまぎらわせようとする気持ち。
- イ 清凜で仲が良かった友達からはもう連絡は来ないことを薄々感じてはいるものの、その考えを打ち消さずにはいられない気持ち。
- ウ 清凜に通っていた時の友達よりも、友達のふりをしてるつもりだった梢たちの方が大切に思えてきたこととまどう気持ち。
- エ 清凜の友達にたまらなく会いたくなかったが、忙しい彼女たちのじゃまをしてはいけないと何とか自分をおさえようとする気持ち。

問七 —— ⑥ 「騒々しいまわりの声が急速に遠ざかっていくのを感じた」とありますが、この部分の表現の効果について最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 周囲の騒がしい音が入ってこなくなるほど、「わたし」が心も体も疲れきっていることを表す効果。
- イ これ以上心が傷つかないように、「わたし」が意識的に周囲と距離を置こうとしていることを表す効果。
- ウ 「わたし」が周囲から切り離されたかのように、心の内に渦巻く感情に引き込まれていることを表す効果。
- エ クラスメイトが泣きそうになっている「わたし」に気づき、「わたし」の様子をじっと見ていることを表す効果。

問八 —— ⑦ 「こんな特別なメニュー」とありますが、「わたし」にとってこのゼリーが「特別なメニュー」である理由として**適当でない**ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 恋しく思っていた清凜の七夕ゼリーを超えるほどの華やかなものだったから。
- イ 何人もの友達が自分のゼリーのトッピングを提供してくれてできたものだから。
- ウ 「わたし」が興味を持っていたものを友達が覚えていて作ってくれたものだから。
- エ 梢が「わたし」に対して謝罪の気持ちを伝えたくて作ってくれたものだから。

問九 本文の表現の特徴の説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 会話文や心の中でつぶやいている部分に「……」を多用することで、口に出して言葉にするのをためらう登場人物の気持ちや複雑な心情を表している。

イ 「層たみのにおい」や「甘酸あまっぱい味と、ひんやりした食感」といった五感を通じた表現が物語に臨場感あつを与え、その時々「わたし」の心情を生き生きと表現している。

ウ トレイを汚よごした「イチゴジャム」や、寄せ集められた「星型のトッピング」などの物を効果的に用いることで、「わたし」の心情や四人の友達たちの想いを暗示的に表現している。

エ 第三者の視点から物語を語ることで、主人公である「わたし」から見える世界だけでなく、梢や朋華ともかの視点から見た出来事や彼女たちの内面も細やかに描えがかれている。

☐ ③ 次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 日の出のコウケイが美しい。
- ② 各国のシュノウが集まる。
- ③ 有効なホウサクを考える。
- ④ 自分勝手な行動をヒハンする。
- ⑤ 病気の父をカンゴする。
- ⑥ 故郷に雪がフる。
- ⑦ 彼の才能をミトめる。
- ⑧ 実験はシコウ錯誤の連続だった。
- ⑨ 予定を手帳に記す。
- ⑩ 臨時窓口を設ける。
- ⑪ あの方は日本画の大家だ。
- ⑫ 血眼になって探し回る。

